

生存科学研究ニュース

Vol.17. No. 2 . 2002. 3.10 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1

電話 03-3563-3518 FAX 03-3567-3608

Eメール seizon@mx1.alpha-web.ne.jp

第2回基本構想委員会

平成14年1月21日（月）生存科学研究所会議室において、標記委員会が開催されました。

今回は平成14年度の自主研究を申請している責任者の方々を招き、来年度の自主研究予算案を作成しました。

原案は平成14年3月8日の理事会で検討される予定です。

来年度実施予定の自主研究は下記のとおりです。

記

1. 川崎病研究会
2. 21世紀における生存科学としてのバイオシックスの構築研究会
3. 医療システム改革の基礎研究会
4. 循環型社会と生存科学研究会
5. 武見太郎研究会
6. 代替医療と国民医療費研究会
7. 自主研究中長期基本構想委員会

第4回常務理事会

平成14年1月25日（金）生存科学研究所会議室において、第4回常務理事会が開催されました。検討結果は次のとおりです。

1. 予算について

専務理事より平成14年度収支予算についての全体的な説明が行われ、そのうち調査研究項目別予算に関して、先の基本構想委員会において検討された予算額が示され、審議の後了承されました。

2. 委員会・研究会報告

理事長より各委員会、研究会の活動状況が報告され、出席の研究責任者からも補足説明が行われました。

3. 平成13年12月31日までの収支計算書が報告され、了承されました。

4. その他

出席者から研究所の一層の充実をはかるためのさまざまな意見や提案が出されました。

第2回評議員会・第3回理事会

平成14年3月8日（金）午後2時から教文館会議室において第2回評議員会・第3回理事会が開催されました。

理事会は江見康一理事長が議長に就任し、平成14年度の基本方針が説明され、続いて資料に基づいて来年度の事業計画ならびに予算について討議がなされ、原案通り議決されました。

引き続き、向山定孝評議員が議長に選任され、評議員会が開催され、理事会の議決が承認されました。

基本方針：

研究所運営の基本は、研究事業の活発化と財政基盤の安定化にある。生存科学のめざすところは、生命科学と環境科学の総合化によって、人類の新たな生存秩序を保証する社会経済システムの構築にあるが、新年度に立ち上げられた研究事業は、いずれも積極的にこの方向をめざすものである。

他方財政基盤については、現下の厳しい経済情勢の中で、収入面の現状維持につとめ、支出面の各項目ごとの再点検によって全体としての効率化をはかり、資産運用における情報収集と的確な判断と相まって、その安定化に向け努力する。

平成14年度研究事業は下記のとおり議決されました。

記

自主研究事業：（ ）内は各責任者

A. 川崎病研究会（川崎富作 理事）

B. 21世紀における生存科学としての
バイオエシックスの構築研究会
（大林雅之 理事）

C. 医療システム改革の基礎研究会
（府川哲夫 理事）

D. 循環型社会と生存科学研究会
（江見康一 理事長）

E. 武見太郎研究会
（丸井英二 理事）

F. 代替医療と国民医療費研究会
（津谷喜一郎 理事）

G. 自主研究中長期基本構想委員会
（江見康一 理事長）

共同研究事業：

A. 日本川崎病研究センター
（川崎富作 理事）

広報活動事業：

A. 生存科学研究ニュース
（藤原成一 理事）

学術研究誌発行事業：

A. 学術誌『生存科学』
（鈴木雪夫 専務理事）

第12回21世紀世界の文明と生存の研究会

平成14年2月23日（土）午後6時より生存科学研究所会議室において標記研究会を開催しました。

今回は(株)東芝 経営企画部の田井一郎（たい・いちろう）氏をお招きして、「かけがえのないエネルギー」というタイトルで話題提供をお願いしました。

氏は原子力工学のご専門で、現在はさらに幅広く企業の企画運営に活躍していらっしゃる

います。21世紀の世界を考える一助となると
思い、お招きしました。

お話は2部構成で、前半は原子力に関わる
エンジニアとして今まで携わってこられた分
野についての簡単な解説、それを前提として
後半は地球全体ならびにわが国のエネルギー
の問題について分かりやすく解説されまし
た。

前半では、沸騰水型原子炉の計測方法の開
発に関わる最初の仕事から始まり、スリーマ
イルアイランドでの事故以後、ヒューマンフ
ァクターの重要性を重視し誤判断をなくすた
めの安全な制御室の設計、さらには銅蒸気レ
ーザーなど、ふだん聞くことのできない世界
についてお話をいただきました。技術部門で
の氏の最後の仕事は、グループとしては現在
も継続中の研究事業で燃料電池の開発だっ
た、とのことでした。

後半は、それまでの技術的な話を受けて、
現在ならびに今後の地球における人類の生存
のあり方についてエネルギーの視点から次の
ように話されました。

地球上の資源、とくに石油は40億年以上か
けて徐々に形成されたきたが、人類はそれを
100万倍の速度で消費しつつあります。人類
が火を自らのものとして以来、地球上のあら
ゆる側面で需給のバランスを崩してきている
からです。とくに人口の急増はここ100~200
年の出来事で、途上国に住む多くの人々が現
在の先進国のように多量にエネルギーを使い
出したら何が起きるのでしょうか。人間一人が
生きていくために使うエネルギーは平均一日
約70ワットとのことでした。現在の日本では一

人あたり約3キロワットを毎日消費していま
す。すなわち、日常必要なエネルギーの40倍
ほどを使って生活している勘定になります。
さらにアメリカは日本の2.5倍程度という話で
すから、途上国であれば100人が暮らせるエ
ネルギーを一人で使っていることになりま
す。

それでは今後、中国やインドやアフリカで
人口が増え、その人たちが自分たちもアメリ
カ並みにエネルギーを使いたいと考えたとき
何が起こるのでしょうか。

そうした問題は、食料でも同じであるし、
埋蔵量の半分以上を掘りつくした希少金属で
も同様のことが起きているということです。
まさしく「希少資源の配分」の問題が明瞭な
形で起きているわけです。21世紀の半ばには、
資源やエネルギーについて予断を許さない
将来的見通しが明らかになると思われま
す。地球の温暖化にしても、抽象的な問題で
はなく人々がどのように生活するかという問
題と密接に関わっているわけです。

以上のとおり話題提供をいただいたあと、
討論に入りました。

果たして人類は理性によってこうした状況
をコントロールし、乗り越えていくことがで
きるのでしょうか。あるいは共倒れになるま
で走り続けるのでしょうか。少なくとも今回
の討議ではきわめて悲観的でした。現在の人
類の生存の問題だけでなく、将来について
は、今までの教育に組み込まれていないため
に、グローバル化にともなって問題は急激に
大きくなっているにも関わらず、エネルギー
の状況について一般には認識がされていない

のが現状です。本当にわれわれ人類が「種」としてこの地球で生存していくとしたら、18世紀から19世紀の産業革命をさらに越える原理を発見していかなければならないのではないか、というのが議論の到達点のひとつとなりました。

今回は、今までとは異なる視点からの話題提供でもあり、参加者は新鮮な驚きと議論とを楽しむことができたようです。

(丸井英二)

日 報

1月11日（金）三役会

1月21日（月）拡大中長期基本構想委員会

1月25日（金）第4回常務理事会

2月23日（土）21世紀世界の文明と生存の研究会

3月1日（金）三役会

3月8日（金）第3回理事会・第2回評議員会